

十八世紀のカルテイエ・ラタンと

哲学者エルヴェシウスの学生時代〈中〉

—— 評伝 エルヴェシウス家の人々〈その八〉 ——

永治日出雄

第二節 イエズス会の結成とコレージュ・ルイ・ルグランの創設

(一)

一五一七年にヴィッテンベルグの神学教授マルティン・ルターは免罪符非難の九五カ条を公表し、ローマ教会と中世社会を揺がす宗教改革が始まった。神聖ローマ皇帝カルル五世は一五二二年五月ヴォルムスに帝国議會を招集し、ルターの国外追放と著作の公布禁止を決定する。その翌月さきの皇帝選挙をめぐるスペイン・フランスの抗争は、カルル五世に対するフランソワ一世の戦争へと進展した。ビスケー地方の若い貴族イグナティウス・デ・ロヨラが、スペイン国王軍の戦闘に参加し、イエズス会の端初となる天啓を得たのはこのときである。剛勇で際立つた彼はナヴァール王国の古都パンペルーナで重傷を負い、親元に運ばれて大手術を受けた。⁽¹⁾この奔放な青年が病床で劇的な回心を体

「験する様子について、クレティノー・ジョリーの浩瀚な著作『イエズス会の宗教的・政治的・人文的歴史』はつぎのように伝える。

この異常な出来事に関してジョヴァンシ神父が美しいラテン語で綴った手稿を読んでみよう。「イグナティウスに注がれた神々しい光は、暗幕を取り払うように、尊い三位一体の秘蹟やほかの宗教的神秘を明示してくれた。八日間も彼は自己の存在を意識しなかった。そうした亡我の状態、彼の生涯において以後しばしば現われる状態で、なにを見たのであるうか。だれもそれを知らない。天上の幻影をロヨラは用紙に書き留めた。だが、世人の手に触れぬよう、彼は死の直前に焼き捨てた。ただし、数頁だけが焼失を免れ、それらによって難なく推測できるところもある。すなわち、くる日も来る日もロヨラは偉大な恩寵でつねに満たされていた。なによりも彼は主キリストの尊さ、また人類に対する比類なき慈愛を仰ぎ、恍惚となった。イグナティウスは軍事的な概念に通じていたので、神の栄光に逆らう敵を打ち破る將軍、己れの戦旗のもとに兵士を統率する將軍として、キリストの前に自身を差し出した。イエスが元首であり、皇帝である軍隊を編成するという願望がここに生まれた。人類の救済こそ、目標にして目的！こうしたイメージでイグナティウスの精神のなかにイエズス会が初めて出現した⁽²⁾。

信仰を貫く決意を固めたイグナティウスは、まもなく十字軍の遠征を辿ってヴェネチアからエルサレムへと巡礼した。さらに彼はパルセロナ、アルカラ、サラマンカで勉学を重ね、一五二八年二月初めパリのカルティエ・ラタンに到着する。ヨーロッパの思想界に君臨するスコラ哲学は、政治や外交や軍事の分野でも強力な理論的武器とされていた。この教説を精緻にし、権威づけたのは、なによりもパリ大学やコレージュ・ド・フランスの神学博士である。パリではこうしたスコラ学者の講義に各国からの留学生が蝟集し、他方ルターやツヴィングリの改革思想も関心を集め

ていた。⁽³⁾ イグナティウスのフランス留学とイエズス会の結成に関するジョリーの叙述を引用する。

こうした知の十字砲火のなかでイグナティウスは、スペインで垣間見た人文科目の勉学を、コレージユ・ド・モンターギユで始めた。絶えざる労苦や長い危険な旅も、彼の烈々たる熱情を弱めてはいなかった。彼は聖務に限度を設けた。学芸に多くの時間を当てるため、祈祷の時間を限定したわけである。聖職者としての彼にとつて、もつとも手痛い代償である。コレージユ・ド・モンターギユからやがてコレージユ・ド・サン・バルブに移り、さらにドミニコ会士のもとで神学課程へ進んだ。

みずから学ぶという熱意のあまり、他者の救済を疎かにはしなかった。イグナティウスの心には過剰な生命がみなぎり、惨めな人々に奉仕する心情は、艱苦や迫害によつて一層強まるばかりであった。学問を修めながら、学問自体よりも高遠な目的を志した。新たに創設された修道会、かつて亡我の境地で幻影を見詰め、著作『靈操』では他と戦うひとつの軍旗として象徴された修道会が、彼の思想の根底には実在した。イグナティウスはまだ単独であったが、不動の信念をもつ意志の内部で、イエズス会がすでに誕生していた。みずからの軍隊を組織するため、欠けるのは兵士だけである。それを彼は学友のなかから徴募した。

サヴォワ出身の学生ピエール・ルフェーベルと若いナヴァール貴族フランシスコ・ザビエル。このふたりが初めて彼の門弟となつた。⁽⁴⁾

さらにアルホンス・サルムロンなど四名のスペイン人留学生もイグナティウスの理想に賛同し、一五三四年八月五日（聖母披昇天祝日）にモンマルトルのノートル・ダム礼拝堂で清貧・純潔・服従の誓いを立てた。おりしもヨーロッパ諸国は宗教改革と三十年戦争の嵐に晒されて、ローマ教会の威信は失墜し、ヨーロッパ諸国の世情は疲弊していた。イグナティウスはじめ七名の同志はスペイン北部で布教を開始し、予言者的な雄弁や窮民への奉仕活動によつ

て支持と組織を広げる。その戦闘的な使命感と軍隊的な訓練は、宗教改革への反撃とカトリック勢力の失地回復のため、前衛的な任務を担い始めた。オスマン・トルコに阻まれてエルサレム巡礼を断念した彼らは、やがてアドリア海沿岸を経て聖都ローマに到達した。一五四〇年教皇パウルス三世は勅書によってこの教団を認可し、キリストとローマ教会に忠実な結社としてイエズス会の名称を授けた。⁽⁵⁾ローマ教会の発した歴史的文書を参照したい。

我らの愛し子であるイグナティウス・デ・ロヨラ、ピエール・ルフェーベル、ジャック・レーネ、クロード・ルジェ、フランシスコ・ザビエル、アルホンズ・サルムロン、シモン・ロドリゲス、ジュアン・コデユール、ニコラス・ド・ボバディラについて今般以下の事柄を確認した。これらの人たちはバンペルーナ、ジュネーヴ、シゲンザ、トレド、ヴィゼウ、エンブルン、ピアチェンツァなどの都市または司教区でみな聖職者の職にあり、パリ大学において学芸学士の称号を取得し、さらに数年神学課程で学を修めている。幸いにも精霊の導きによって、彼らは世界のさまざまな国から寄り集まり、主イエス・キリストおよび歴代のローマ教皇に奉仕するため、世俗的な快樂を放棄してつねに身を捧げた。また、主のブドウ畑で彼らは孜孜として働き、一定の許可を得たうえで民衆に神の言葉を説いた。信仰する者には聖なる道を進んで、永遠の幸福を授けられるよう彼らは激励し、敬虔な冥想の習慣を植えた。さらに彼らは病院でも力を尽くし、子どもや無学な者にキリスト教教育の基礎を教えた。一言で述べれば、滞在したすべての国において、いかなる讚辞にも値する熱意でもって、博愛的なあらゆる事業、魂を慰める任務を実践したのである。〔中略〕

十字架の旗のもとに神のため武器を取り、唯一なる主に、さらにはその地上における代理人、ローマ教皇に奉仕したいと望む者すべてに関して、我らの教会はあらかじめ永遠の純潔を厳かに誓わせ、イエズス会と命名したい。人間の魂をキリスト教徒の生活や教理へ導くためにこの修道会は設立され、そうした基本構想の一翼

を担うことが成員には求められる。すなわち、公衆への説教や神の言葉の伝達をとおして、さらには心霊の修業や博愛的な事業をとおして信仰を伝播するがよい。なかなんぞ子どもや、キリスト教について無知な人々に教理問答を教えたり、信者の心を癒すよう懺悔を聴いてやるがよい。〔中略〕

ローマIIサン・マルコにて、主キリストの托身一五四〇年、一〇月五日、教皇第五年⁽⁶⁾。

以後この修道会はローマ教会の強力な援護を受け、世界各地へ壮大な布教事業を繰り抜ける。イエズス会公認の翌年パウルス三世は会士サルムロンをイギリスへの特使に任命し、ヘンリー八世の暴虐に苦しむアイルランドの実態をも調査させた。当初からの同志ルフェーベルもドイツやスペインやポルトガルで民衆に福音を説き、カルル五世の臨席を得たラティスポナの宗教会議でプロテスタントの代表者と論戦を交える⁽⁷⁾。そして、私たちに馴染みの深いザビエルは、ポルトガル国王ジョアン三世とローマ教皇パウルス三世の命を受け、モザンビーク、ゴア、マラッカ、日本へと伝道の旅を続けた。これらの滞在地で綴った数多くの書簡において、ザビエルはアジア諸国における布教の状況と成果を詳しく報告し、敬虔で堅忍な宣教師をさらに育成するようイエズス会に求めている。

イグナティウス宛ザビエルの書簡(一五四九年一月一四日ゴアより)

私が今までに会ったこの地のインド人は、イスラム教徒にしても異教徒にしても、たいへん無知です。彼らを改宗させるために、未信者のなかに入ってゆかねばならない宣教師は、それほど高い学問を必要としませんが、堅固な徳が必要です。(すなわち) 従順、謙遜、堅忍不拔、忍耐、隣人愛、そして罪に陥る数かずの機会がありますので、堅固な貞節、そしてまた健全な判断力がなければなりませんし、苦勞を絶え忍ぶために体力が必要です。私がこのようにお知らせいたしますのは、こちらへ派遣する人びとの霊的な資質を試す必要があることを分かっていただくためです。

インド地方では、キリスト信者がいるすべての地域にイエズス会の神父のだけかがおります。モルッカ諸島には四人、マラッカには二人、コモリン岬には六人、クイロンには二人、バイセンには二人、ソトコラには四人おり、ゴアには学院のインド人〔学生〕を除いて、もつとたくさんおります。⁽⁹⁾

ゴアのパウロ、ゴメス、ガゴ神父宛ザビエルの書簡（一五四九年六月聖体大祝日マラッカより）

マラッカに到着してから、この地方でフランシスコ・ペレス神父が大きな成果を挙げているのを見て、たいへん驚き、感嘆しております。彼は日曜日と祝日にはかならず大聖堂でポルトガル人のために説教しています。そして晩には男奴隷、女奴隷、この地方の人、解放された奴隷、囚人に信仰箇条を説教します。（中略）

彼はいつも人びとの心の奥深く入って罪から解放させ、主なる神に仕えるようにさせています。たくさんの人が彼の説教に集まり、教会に入りきれないほどです。彼はすべての人に対して柔和であり、またすべての人からたいそう好かれ、主なる神のものである靈魂を救うために、大変に熱心なので、長官からも全市民からも非常に愛されています。彼が主なる神のお助けによって、絶えず病気で体のぐあいが悪いにもかかわらず、この地方の人びとのために働いているのを見ると、私は恥ずかしくなります。

ロケ・デ・オリヴェイラは子供に読み書きを教えています。子供に教えることは苦勞の多い仕事ですが、この地方にとつては少なからぬ利益となつていきます。彼（のところ）へ大勢の少年が集まって来て、一つの組には読み書きを、他の組にはラテン語を教えています。少年たちのうちにはたいへん進歩した者もいますし、学びたいと思つたことを十分に学んだ者もいます。彼らは公教要理を読んだり、聖母マリアの小聖務の時課を唱えたり、行儀よく修道者のように慎み深い態度で主なる神に恩寵を与えてくださるよう願つたりしています。⁽⁹⁾

イエズス会の初代総長に選出されたイグナティウスは、世界各国における布教事業を指揮しつつ、カトリシズムの本拠ローマとヨーロッパ学芸の中心パリに活動の重点を置いていた。一五四八年シシリ副王からコレジウム・メシーナの運営を委託され、三年後にローマでもカピトリノ神殿麓に広大なコレジウム・ロマーヌムを創建する。ここには勉学を望む青少年が貧富を問わず就学し、イエズス会士から無償の教育を授けられた。世評を高めたイグナティウスは、同校の教授陣をパリ大学神学部に倣って強化し、一五五三年からスコラ学の講座も開設する⁽¹⁾。こうしたイエズス会の学校経営はイタリアでも大学からの非難を誘発するが、パリではさらに大きな抵抗と攻撃に晒された。アルステイド・ドゥアルシユの研究書『パリ大学とイエズス会士』によってコレージュ新設をめぐる敵意と抗争を辿ろう。

十六世紀の中葉イエズス会士が初めて登場したとき、パリ大学は最盛期を迎え、ヨーロッパのあらゆる民族の学生を数多受け入れる特権を有していた。イエズス会の創始者はこれを熟知しており、人知の中核にして光源であるパリにこそ、他校の規範となしうるコレージュ、若い世代にカトリックの深い刻印を授けうるコレージュを設立しようと決意した。

教皇ユリウス三世はイグナティウスの構想にとりわけ好意を示し、自己のコレージュで学生に大学入学資格・学士・修士・博士の称号を試験後授ける権利を、イエズス会の会長と幹部全員に与えた(一五五四年)。部外者に敵対的な大学に抗して、これはコレージュの設置をイエズス会士にも許すことを意味する。ピオ四世も一五六〇年八月一九日の勅書でイエズス会の権限を肯定し、大学のあらゆる特権と規定を打ち破ってもよい、と公会議において言明した。

しかし、こうした教皇の勅書はイエズス会に最大級の特権を認めるものであり、フランスでの進出をかえって困難にした。教皇に直接庇護され、司教による正規の裁可を受けぬ修道会に、聖職者身分は当然ながら敵意を示した。フランス王国にはさまざまな階層の宗教者が満ちみちていたが、彼らもみな不信の念や嫉妬の眼差でそれに対応した。パリ大学は教育上の特権や学位の授与権を正面から脅かされ、激しい抵抗の構えを示した。さらに高等法院の裁判官は公共の秩序を守る責務にあり、紛糾を招く新たな事柄にはかならず反対すべきであると信じていた。⁽¹²⁾

伝統的な権威からの異議に直面して、イグナティウスもパリでの学園設立には慎重な態度を保った。一五五六年に彼はローマで逝去し、カルティエ・ラタン在住のイエズス会士に後事が託された。まもなくクレルモンの司教ギヨーム・デュブラが支援の手を差し伸べる。この高位聖職者はトリエントの公会議に出席し、プロテスタントとの対決を唱導するイエズス会に共感を抱いた。パリの名義司教をも兼ねたデュブラは、ラルブ街の広大な邸宅をこの修道会に提供し、また遺言としてコレージュの設置構想と運営資金の寄贈を申し出た。やがてシャルル九世の摂政カトリック・メデイシスがカトリックとプロテスタントの調停を図り、ボワツシイに聖職者会議を招集する。⁽¹³⁾ この集會を主宰したトゥールノン樞機卿は、イエズス会からの請願に対してつぎのような結論を下した。

（イエズス会士）と名乗る人々から申請され、パリ高等法院の本年二月二二日付判決によって要請された事項に関しては、この修道会がフランス教会の総会または次回の会議に申請を提出し、そこにおいて認可されるように命ずる。オーヴェルニュ地方ピヨンの参事会員と住民から出された請願、ならびにクレルモン司教であった故ギヨーム・デュブラ氏の遺言状執行人より提出された請願についても同様である。（中略）

パリ高等法院から委託を受けて聖職者会議は、この団体ないし結社を新たな宗教組織としてではなく、団体

ないしコレージュとして従来も容認し、今後も認可する。ただし、以下のような条件を付す。すなわち、イエズス会または（イエズス会士）の名称を掲げてはならない。この結社ないしコレージュに対して当該教区の司教は監督・裁判・矯正の権限を有し、違反者や犯罪者をそこから追放できる。また、この結社の成員は（宗教的な次元においても世俗的な次元においても）、司教、参事会員、司祭、教区および（大学）を侵害する事柄を企ててはならない。（中略）

国王の命によりポワツシイ女子修道院食堂において開催されたフランス教会ポワツシイ総会の決定は以上のとおりである。今次の集会を主宰したりヨン大司教¹⁴フランス首座大司教¹⁴フランス教会首席トゥールノン樞機卿殿下、および本件の報告を行ったパリ司祭の花押と封印、さらに幹事・書記を勤めたニコラス・ブルトン神父とギヨーム・ブランキ神父の署名を付す。一五六一年九月一五日月曜日。

このような聖職者会議の裁断によってイエズス会士にも独自のコレージュを創設する道が拓かれた。パリ大学や高等法院の抵抗によって彼らの活動は布教および教育だけに制限され、教区の保有と大学への関与を禁止された。また、イエズス会を表わす校名も許されず、新しい学園は功労者デユプラに因んでコレージュ・ド・クレルモンと呼ばれる。こうして一五六三年古代ローマの街道サン・ジャック街五番地に、ソルボンヌの殿堂と対峙してイエズス会の広大なコレージュが創建される。¹⁵G・エモン著『コレージュ・ルイ・ルグランの歴史―創立から一八三〇年まで』を参照したい。

異常な事態にあったイエズス会士は、ポワツシイにおける宣言を歓喜して迎えた。高等法院の法令によって彼らはギヨーム・デユプラの遺贈を享受する権利も獲得した。それまでの不安定な事態が災いして、コレージュの設立のためなんの用意もなかった。彼らは寄贈者の願望を実現するよう思案して、ラングル宮に眼を向けた。

それはサン・ジャック街の広大な建造物であつて、コレージュ・ド・コレとコレージュ・ド・マルムティエに挟まれ、コレージュ・ド・マンを背にしている。当初はこの邸宅をラングル司祭ベルナル・ド・ラトゥールが所有し、一四八六年にブルゴーニュオーヴェルニュ伯ベルナル・ド・ラトゥールから国王秘書ビエール・シオナルに譲渡された。一五六三年七月二日イエズス会士は当時の所有者であるヘヌカンおよびプレヴォからそれを買取つた。

その広大な建物に教室を設けることは容易であつた。大学の教官は報酬を受け取つていたが、イエズス会士は無償で教育を授けると発表した。⁽¹⁶⁾

中世以来の伝統を誇り、人文主義をも撰取したパリ大学は、絶対王政の確立につれて高踏的な学風と退嬰的な風潮を強めていた。また、コレージュ・ド・ラ・ソルボンヌをはじめ、人文学部の管轄にある学園も沈滞した空気に淀みつつあつた。反対に新たに登場したコレージュ・ド・クレルモンは明確な方針と無償の教育によつて絶大な人気を獲得する。しかし、教員資格や学位授与をめぐるイエズス会は、とくにパリ大学人文学部との間で係争を重ね、ジャンセニストの拠点ポール・ロワイヤルでなされた清新な教育とも拮抗した。しかし一六五三年十五歳のルイ十四世は摂政の母后アンヌ・ドートリツシュ、宰相のマザラン樞機卿、亡命中のイギリス国王チャールス二世とともにコレージュ・ド・クレルモンを訪れ、悲劇とバレエの上演に臨席する。また、親政を開始したあとも太陽王はサン・ジャック街を再度訪れ、中等教育におけるイエズス会の覇権を決定的にした。⁽¹⁷⁾ 校名変更の契機となつた一六七四年の来臨について、エモンはつぎのように叙述する。

かくも待ち望んだ来賓を迎えるため、万端の準備が調えられた。今回も演劇に多くの経費が充当され、正面の広場には劇場が建造された。国王がチュイルリー宮を出立される！神父たちが急いで校門に並ぶ。やがて汗

ば騎士が到着し、ついで街路の石畳に近衛兵が整列する。まもなく近習と青年貴族の一団に護衛されて、国王の儀装馬車が着いた。世界最高の君主であることを示すかのように、国王は眩しいほどの威厳をもって挨拶し、舞台正面の天蓋の下に案内される。幕が開くと、修辞学級のひとりの学生がローマ貴族の衣装で登場し、韻文でルイ大王を太陽に喩える前口上を朗唱した。君主の臨席によって深く心を動かし、感動し、幸せて満面を輝かせた人々は、その月並みな称賛を真実の表現と感じとった。幕間には舞踊の教師と一緒にバレエを踊った。(中略)

国王が満足されたことは明らかであった。彼は随員の人たちと寛いで話し、演技した学生へ気さくに声をかけた。そうした学生の父親も多くはそばに侍っていた。国王は今回の感激を二十年前に眺めた祭典と比較する。そして、だれも見守るなかで、つぎのような声はつきり聞こえた。「実際ここではすべてに感嘆した！信じて疑わぬ。これこそ余のコレージュである。」自分たちのコレージュにルイ大王の名が授けられた、とイエズス会士は国王の言葉を解釈した。先人たちがパリのに創立者の名前を付けた際にも、このような承認を耳にした例はない。君主を儀装馬車まで送ったあと、夜のうちに職人を呼んで、つぎの文言を黒大理石に刻ませた。

Collegium Ludovici Magni

翌朝この新しい石碑が正門に据えられた。(中略)

イエズス会士は君主の意図を思い過したのであろうか。その後十二年間よく判らなかつた。だが、石碑は置かれたままであり、宮廷が黙認したようにも思われる。しかしながら、一六八二年十月開封特許状によってルイ大王は、みずからをパリにおけるイエズス会士コレージュの創立者であると言明し、そこにコレージュ・ルイ・ルグランという校名を与え、王家の紋章を用いる権限まで授けた。⁽¹⁸⁾

第三節 コレージユ・ルイ・ルグランの教育と哲学者エルヴェシウスの学生時代(その一)

(一)

グリム、デイドロ、レナルルなどによる『文芸通信』一七七二年一月号は、前年暮に急死した哲学者クロード・アドリアン・エルヴェシウスに関する一文を掲載している。この雑誌は主としてヨーロッパ諸国の王侯貴族を購読者とし、エルヴェシウスの思想や生活にかならずしも好意的ではないが、同時代の証言としてやはり貴重である。

昨年の一二月二六日エルヴェシウスが痛風の発作により逝去した。予期しない、早過ぎる亡失である。まだ五六歳であった。粹な男という言葉がフランス語になれば、彼のために造つてもよい。彼はそうした男の典型であった。公正かつ寛大で、穏かな気質と暖かな心を持ち、実際において分け隔てをせず、社会で必要とされるあらゆる美德を備えていた。彼の場合そうした美德が部分的には人間本性への信念に基づいている。(中略) 彼はイエズス会のもとで初期の勉学を行った。たしかコレージユ・ルイ・ルグランであったと思う。少年時代にはあまり期待されなかった。頻繁に鼻カタルに冒され、そのため散漫で愚昧な外見を呈した。反対に身体の訓練では完璧な出来栄えを見せる。美しい容姿に恵まれ、とりわけダンスにおいて傑出した。ダンスへの情熱を彼はのちのちまで保持し、オペラ座で有名な舞踊家デュブレの代役として一回か二回は踊つたと言う。¹⁹⁾

哲学詩『四季』を著したジャン・フランソワ・ド・サン＝ランベールは、エルヴェシウスの終生変わらぬ親友であった。後者の遺作『幸福』は逝去の翌年に刊行され、序論としてサン＝ランベールによる『エルヴェシウスの生涯と作

品」が付けられた。この小伝ではエルヴェシウスの学生時代がやや詳しく述べられている。宮廷医の長男クロード・アドリアンの就学についてサン＝ランペールはまずつぎのように述べる。

コレージュに入学して若いエルヴェシウスは、『イリヤッド』とクアント・クルスを読んだ。このふたつが彼の性格を変えた。まえには大変臆病であったのに、いまや大胆になった。勉学への熱意がしばらく冷めた。彼は軍務に就くことを望み、戦争のことしか話さなかった。

当初は教師の専制、威嚇的な口調、学園での身の束縛が彼を反抗させた。下らない仕事の強制にも嫌悪を催した。だが、修辞学級に進学したあと、教師のポレ神父はこの生徒が称讃にきわめて敏感であることに気づいた。すこし努力したエルヴェシウスが、ポレに褒められて、一層大きな努力をするようになった。物事を敷衍することが、当時コレージュでは流行していた。⁽²⁰⁾

少年エルヴェシウスがどの学園に入学したかが、この小伝では明記されていない。しかし、ポレ神父が主として勤務したのはコレージュ・ルイ・ルグランであり、彼に師事したというサン＝ランペールの記述は、さきに引用した『文芸通信』の説明と符合する。なお、ニュージークランドの研究者アーン・カミングは、クロード・アドリアンのコレージュ入学を、十一歳または十二歳のとき、すなわち一七二六年頃と推定している。ただし、カミングの現地調査によれば、コレージュ・ルイ・ルグランの古文書は数次の動乱によって多く散失し、とくに一七二〇年から一七三〇年までの学籍帳簿が見出せない。⁽²¹⁾

人間形成や学校教育に関する課題はエルヴェシウスの思想において重要な要素をなしている。しかし、ルソーとは異なつて彼の著作ではみずからの生活や経歴がほとんど語られていない。一七五八年に公刊した大著『精神論』は「教育」と題する長文の一章によって完結している。同書でもエルヴェシウスは一般的な次元で教育論と学校批判を提起

するが、そうした論述の根底に私たちはコレージュ・ルイ・ルグランにおける彼自身の体験を読み取ることができる。『精神論』第四篇の第一章「教育」から該当する部分を引用したい。

人々は公教育の改革など考えてもみない。これを私が詳細に論じても退屈で無益に感じるだけである。きわめて忌まわしい弊害、もつとも改め易い弊害すら放置されている、と指摘するに留めよう。高く評価される事業を為し遂げる人は、己れの時間をもつとも有効に使うであろう。人生の成否が時間の節約になかば依存することを、だれが疑おう。こうした真理を会得した人には、公教育改革の必要性が一目瞭然ではないか。

たとえば、母国語の合理的な学習に一定の時間を当てるべきである。学校を出れば、すぐに忘れてしまう死語の学習に、八年も十年も費やすほど、愚かな業があるうか。人生行路においてそれが大いに役立つのだろうか。「コレージュに青少年を長く就学させるのは、ラテン語を習得するよりも、むしろ専心の習慣を体得するためである。」このように筆者に反論しても無駄である。勉学の習慣を涵養するために、それほど魅力に欠けず、それほど嫌気を誘わない学習を課すことができないか。生まれながらに持つ知識欲、少年期に燃え上がる勉学への意欲を、ラテン語によって減退させ、消滅させるのか。⁽²²⁾

自身の苦淡な体験に基づいて、ダランベールが執筆した『百科全書』の項目「コレージュ」と同じく、エルヴェシウスの論述でもコレージュの現状に対する批判、とりわけラテン語偏重に対する非難に力点が置かれている。しかし、これら百科全書派がコレージュの社会的役割、ひいては公教育の存在意義を否定したと速断してはならない。公教育の理念と意義はフランス大革命の時期に（最後の哲学者）コンドルセによって確立されるが、一七七三年に出版されたエルヴェシウスの『人間論』でも公教育の重要性が強調されている。この膨大な著作では認識、知識、社会、政治、宗教、道徳などさまざまな問題が検討され、巻末の第十篇において教育改革の構想が提起された。ここでも一般的な

次元において家庭教育に対する公教育の優位をエルヴェシウスを以下のように論証する。

家庭教育に対する公教育の優位

公教育に認められる第一の利点は、〈青少年が健全な場で教育を受けること〉である。

家庭教育の場合は子どもが親の家に住み、大都会では大抵その家屋が狭苦しく、不健康である。

反対に公教育の場合は施設が田園に建築され、風通しがよい。その広大な敷地で青少年の身体を強化し、健全にする訓練を行うことが可能である。

第二の利点は〈規範の厳格さ〉である。通常親の家では規範が公教育の施設における厳格に守られない。コレッジではすべてが時間に服従する。時計が教師や用務員に指令する。時計が食事や勉強やレクリエーションの長さを定める。時計が秩序を維持する。そして、秩序なくして、継続的な勉強はありえない。秩序があれば、歳月を長く活かせる。秩序を失えば、歳月が早く過ぎ去る。

第三の利点としては〈競争心の鼓吹〉が挙げられる。

少年期の主要な動因は恐怖と競争心である。

競争心は自己を多数の他者と比較するところから生まれる。

才能と美徳への希求を燃え立たせるのに、競争心はもつとも効果的である。親の家で子どもはこうした比較をなしえず、それだけ見劣りする教育にしか浴しない。

第四の利点は〈教師の聡明さ〉である。

人々の間には、したがって親たちの間には愚昧な者と聡明な者が存在する。息子にどんな教育を授けるべきか、愚昧な者は知らない。聡明な者はそれを知っている。しかし、彼らと言えども、己れの観念を息子に判り

易く教える方法を弁えていない。そうした実践的な知識はコレージュのなかで自身の体験や伝統的な試練によって会得されるものであり、もつとも教養のもつとも豊かな人たちにも往々欠けている。

第五の利点として挙げられるのは、(公教育に固有な毅然とした性格)である。

家庭教育が雄々しいもの、勇壮なものであることは滅多にない。ひたすら安全を願う親は、子どもの心を傷つけることを怖れて、あらゆる気紛れに譲歩し、そうした怯懦な追従を父母の愛と名づける。⁽²³⁾

ここではエルヴェシウスのコレージュ就学に係る同時代の記述を検討し、またコレージュ一般に関する彼自身の論述を摘出した。しかし、エルヴェシウスの人間形成に対する学校教育の影響を深く洞察するには、以上のような文献のみでは充分でない。私たちは啓蒙思想家によって批判的に描かれた公教育の有様だけでなく、実証的な研究によって解明されたコレージュ・ルイ・ルグランの実像をも充分に把握する必要がある。

(二)

一九二五年フランスにおける卓越した学校史が、ギユスターヴ・デュボン^{II}フェリエによって上梓された。『コレージュ・ド・クレルモンからリセ・ルイ・ルグランへ(一五六三—一九二〇年)—三百年にわたるパリのあるコレージュの日常生活』全三巻がそれである。歴史家デュボン^{II}フェリエは、同学園やイエズス会の膨大な古文書を調査し、建物と施設、教官の構成、学生の階層、授業の内容、慣例や行事、学寮の実情、等々をきわめて精細に検討した。(この学園は数次の校名変更を行っているが、中等教育機関としての連続性を重視して、デュボン^{II}フェリエはしばしばコレージュ・ド・パリの仮称を用いている。ただし混乱を避けるため、本稿における叙述と訳出ではそれをルイ・ルグランという略称で統一したい。)主としてこの大著に依據しながら、エルヴェシウスを受け入れた学園についてさ

さまざまな角度から考察していこう。

まずルイ・ルグランに在学した学生は、どのような地域の出身であり、どのような身分・階層に属したであろうか。一七六二年教育界からのイエズス会士追放の際に、ルイ・ルグランでは創立以来の学籍総覧が消失した。しかし、同学園の古文書室などに遺された書類によって、デュボン^{II}フェリエは一六四〇年から一七六二年に至る間の学生について探索した。その周到な調査によれば、学生としておよそ五〇〇〇名の氏名が判明し、なかでも二六四八名の出身地が確認できた。⁽²⁴⁾以下の引用は出身地の内訳に関する彼の報告である。

履歴を復元できたのは二六四八名で、うち一五七九名がパリの出身である。フランスの地方に生まれた者は八九四名、わが国の植民地に生まれた者は一一六名、そして外国に生まれた者が一六八名に及ぶ。したがって、ルイ・ルグランはパリっ子の学園であつて、学生の過半をパリっ子が占めた。比較的多くの学生を送り出した地方は、ブルターニュ、ノルマンディー、ラングドック、プロヴァンス、ピカルディである。^{〔中略〕}また、都市としてはルアンが最多数、リヨンとレンヌが第二位、ついでモンペリエ、ポルドー、エックス、トゥール、ヴェルサイユ、そしてグルノーブル、オルレアン、サン^{II}マローが最下位にある。

多くの南仏人にとってサン・ジャック街でプロヴァンス訛りを消すことが、大きな問題であつた。

ルイ・ルグランにたえず留学生を派遣した植民地は、サント・ドミンゴやマルチニックなどの仏領アメリカであり、カナダ、グアドループ、ギアナもこれに^{II}ついだ。仏領インド、ボンデイシエリー、マドラスからも稀に学生が来た。

外国生まれの学生はパリ生まれの十分の一に止まる。イギリスから、とくにアイルランドとロンドンからの者が多い。ベルギー、イタリア、スペイン、アヴィニヨン、ヴェネサン伯爵領の出身もかなりある。ドイツは比

較的すくない。ほかの国々からは少数ではあるが、多い順に記そう。中国、サヴォワ、スイス、非仏領ロレーヌ、ネーデルランド連邦。さらにアルメニア、ポーランド。スペインの植民地、ポルトガル、オーストリア。モンペリアル伯爵領。最下位としてコンスタンチノーブル、ロシア、マルタ。したがって、外国や植民地や地方からの流入が、学園のバリエーション的な色彩を埋没させることはなく、反面サン・エスターシユ教会あるいはポヌヌフ橋の近くで生まれた学生が、学園に漲るコスモポリタンの雰囲気を妨げることもなかった。⁽²⁵⁾

首都の郊外に位置し、地方貴族の子弟を集めたコレージュ・ド・ジュイイとは対照的に、ルイ・ルグランの学生は大半がパリ育ちであった。しかし、出身地に関してとりわけ注目されるのは、ヨーロッパ諸国はもとより、アジアやアフリカからもたえず留学生が派遣されたことである。こうしたルイ・ルグランの国際性は世界的な規模におけるイエズス会の布教活動と密接に関連し、植民地経営や外国貿易を重視する王権の援護によって一層増幅される。学生の出身階層に眼を転ずると、ルイ十四世の来臨を契機として、この学園には王侯貴族や高位聖職者が次々と子弟を託した。そうした無数の事例をデュボン⁽²⁶⁾フェリエは逐一確認し、つぎのように列挙する。

プスヴァンによってポローニヤに設立された学園やアンリ四世によってラ・フレシユによって設立された学園とは異なつて、ルイ・ルグランが貴族だけを受け入れるコレシユでなかったことは、あらゆる証言から明らかである。しかし、大ブルジョアや小ブルジョアが相当な割合を確保していても、エリート貴族の比重は揺がなかった。^(中略)

確認できた同校の書類にはフランスや近隣諸国の王侯貴族の名が記載されている。まず、王族であるブルボン家、ブルボン⁽²⁷⁾コンデ、ブルボン⁽²⁸⁾コンテ、ブルボン⁽²⁹⁾コント・ド・ラマルシユ。ついで諸侯であるド・クロワ、ド・ギーズ、ダンリッシュモン、ド・ラトゥール・ド・ヴェルニユ^(中略)

一二歳から一四歳までの生徒のなかには高位聖職者の相続人もいた。そうした少年は聖職禄受領者、小修道院長、神父、司教座聖堂参事会員、司教などとして敬意を払われた。八歳の生徒がすでに神父であり、十一歳の子どもがすでにメッツの司教であり、十四歳の少年がマルトの大修道院院長であった。

これら剃髪した少年とともに国務尚書、財務総監、閣僚、大使の子弟も勿論在学した。セルヴィアン・ド・サブレ、アムロ、フェリポー・ド・ラヴリエール、コルベール、デマレ、ルテリエ、ルヴォワ、セニユレー、リペリエ、オリー、モブー、ダルジャンソンなどの子弟である。

さらにいわゆる法服貴族、フランス王国の高級官僚も王侯に倣った。ルモワニヨン、ルフェーヴル・ドルメツソン、フェドー、フルリオ・ダルムノンヴィル、ルペリエ・ド・サン・ファルゴー、トゥルモン・ド・グルネ、ニコライ、テュルゴなどがそうである。

これらの家門には新参の貴族も当然含まれる。ただし、子弟をここに託す家系の大部分はブルジョアに、なかんづくパリのブルジョアに属していた。同校でパリ出身者のうちすくなくとも四分の三が平民の生まれであったことは注目値する。反対に地方や外国からはほとんど貴族だけがサン・ジャック街に來た。こうした平民のなかには家名を輝かせる使命を担う者もいた。ポークラン〔モリエール〕、ダンクール、サントウール、フレロン、ファヴァール、アルエ〔ヴォルテール〕、デイドロなどである。

通学生に学資が欠如する場合もときに生じた。そうした生徒にコレージュは料理の残りものを与え、比較的恵まれた学友の援助も頼りとした。

古来の慣わしによって社会的不平等は当然のことと信じられた。王族の傍らにあつても生徒たちはまったく窮屈に感じず、お互いの良さを褒めようとした。ブルジョアも貴族も、好意を示されることを願った。⁽²⁶⁾

とはいえ、サン・ジャック街の学生についても出身階層の大半はパリのブルジョアなど平民で占められた。織物商人を父とするモリエールや公証人の息子であるヴォルテールがこの階層に属することは言うまでもない。五歳以上の年齢であれば、ルイ・ルグランへの入学が認められた。自分で体を洗ったり、着替えたりできない子どもを、神父が世話することもあったと伝えられる。入学選考の際には父母または保証人の同伴が必要であり、すべての子どもに筆記試験と口頭試験が課せられた。プロテスタントやジャンセニストの子弟であっても、平等に扱われたことは注目値する。デュボン・フェリエによれば、入学を許された青少年はさらに五種類の学生に大別される。²⁷⁾

学園への入学が許可されると、生徒はつぎの階層のいずれかに編入された。すなわち、スコラ学生、給費生、寄宿生、通学生、言語学生。

スコラ学生は最年長または超年長というべき存在で、二五歳から三〇歳までの男である。彼らはすでに数年地方で教鞭を取り、神学と哲学の勉強を完成したり、やり直すためにここへ来た。十八世紀の初頭スコラ学生は五〇名ほどで、ある者は風紀の監督を、他の者は自習の監督を担当している。彼らは生徒主監の権限下に直接置かれている。(中略)

すでに成人であるスコラ学生は、原則として将来イエズス会士となる定めにある。給費生はやがて司祭職に就く予定の少年か青年にすぎない。給費生は三種に細分される。第一はギヨーム・デュプレの遺言によって一五六〇年に制定されたもので、クレルモン給費生と呼ばれる。第二はアンリ三世によって一五七七年から一五八二年にかけて作られたもので、国王給費生と呼ばれる。第三は一七〇一年アイルランドのリムリック司教ジャン・ド・モロニによって授けられたものである。

給費制度が作られた当初から、定員が決められていた。原則としてクレルモン給費生は六名、国王給費生は

六名、一〇名、一二名のいずれか、モロニ給費生は九名である。基金の額を考慮して、こうした定員は貨幣価値の変動に応じて変更された。一五八三年には二六名、一五八七年には一八名、十七世紀の中葉には一二名ないし一三名が給費生であった。半額給費生は存在せず、クレルモン給費生が国王給費生を兼ねることはなかった。〔中略〕

これらの給費生は特別監督官の采配を受け、品行と勉学の模範となるよう求められていた。低学年のときには食器類を洗って、食卓に揃える。あとは中庭を掃除したり、雑務を行う。そうした無数の煩瑣な仕事、当然勉強や成長の妨げとなる仕事を怠けないように、上級生が彼らを監視した。〔中略〕

コレージュで宿舍と食物と教育を無償で受け、青春の六年間か七年間を守るために、給費生は残りの生涯について永久的な契約を結ぶことを要求された。一〇歳から一四歳の間に彼らは聖職者としての職務を選び、それに忠実であるよう命ぜられる。そして、コレージュでは特別の衣服によつてだれにも給費生が見分けられた。彼らは貧者として生まれ、貧者として養われてきた。食堂でも寄宿生より割当てがすくない。基金に差があるため、クレルモン給費生は国王給費生より不利であつて、食物にも乏しかった。コレージュでは食卓の残飯やロウソクの切れ端や拾ってきた物品を取っておき、施しとして彼らに与えた。⁽²⁸⁾

ルイ・ルグランにおける寄宿生の人数は給費生の一五倍から二〇倍であつた、とデュボンIIフェリエは述べる。首都の伝統ある中等教育機関、たとえばコレージュ・ダルクール、コレージュ・ド・ナヴァール、コレージュ・サン・バルブでは学寮が生徒の勉学や生活における重要な要素であつた。しかし、中世以来の学生騒動や寄宿生の乱雑さに眉をひそめ、イエズス会士は当初その種の施設を墮落の根源とみなしていた。⁽²⁹⁾ルイ・ルグランに学寮を設けるよう彼らを動したのは、社会各層からの熱望にほかならない。とはいえ、デュボンIIフェリエの綿密な調査は、イエズス会

の学園と学寮もまた身分制社会の美事な雛型であった事実を痛感させる。給費制度や学寮制度が貧窮学生の救済をめざす一方、特権身分の子弟のなかには校内のアルトマンを提供され、召使や家庭教師を伴う者もいた。

自分たちの受講者は給費生と通学生だけで充分である、とイエズス会士には感じられた。しかし、数多くの家族が学寮の設置を要望し、そうした躊躇を一気に押し流した。家族からの擁護や友誼が大切に思われたからである。早くも一五六五年からルイ・ルグランは寄宿生を設けた。一五七〇年から一五七三年まで、そして一五七五年に学寮制度が固められる。なお、こうした学寮の管理をイエズス会に属さない人物にはたして委託できるか、とイエズス会の神父たちは一五八一年に自問している。学寮制度はピヨン、トゥールーズ、トゥーロン、リヨンなどでも試みられた。一六四三年の記録によれば、パリ大学は彼らを中傷し、サン・ジャック街に寄宿生を呼び集めていると非難した。十八世紀の中葉にイエズス会士は九二校で通学生を受け入れたものの、一五校でしか学寮を持っていない。こうした学寮としてもっとも著名であるのは、ラ・フレシユとルイ・ルグランであり、なかでも後者が優っていた。

したがって、学寮の創設に神父たちの独創性が認められるわけではない。むしろそれは公衆の要望に応じて設置したところにあつた。彼らは大部分の寄宿生を組分けして、多くの共同居室に寝起きさせる。そこでは学寮長の管理のもとに年齢の近い生徒が一五名から二〇名ずつ同居した。他方特権的な境遇にある寄宿生はコレージュのなかに一組のアルトマンを専有し、召使、家庭教師、さらには自習監督までも身近かに置いた。こうした(部屋持ち)は己れの付人に囲まれ、コレージュを実家の延長と勘違いもした。自分の費用で付人に部屋の暖房や照明を調えさせたり、衣類を洗濯させたから、なおさらそうである³⁰。

パリの南西二五〇キロに位置するコレージュ・ド・ラ・フレシユもイエズス会の有力な学園のひとつであつた。

当初ここでは乱雑を嫌って学寮を設けず、民間の施設に收容して学生を監督した。⁽³¹⁾ ルイ・ルグランにおいても寄宿生の割合は比較的小さく、校外からの通学が基本的な形態であった。パリ育ちの多くの学生と同じく、モリエールはレール界隈の商家から、エルヴェシウスはグレーブ広場周辺のジェフロワラスニエ街から通学したと思われる。ただし、父親の要望でヴォルテールは学寮に入った。

時代順に記すと、通学生は生徒全体なかで四分の三、四分の五、六分の五分と殖えていった。

かくも多くの通学生は当然いくつかの種類に区別できる。父母の家で暮す者もいた。地方から来た者がコレージュの〈部屋持ち〉になれず、サン・ジャック街近辺でアバルトマンを借り、家庭教師や召使と住む事例も見られる。聖フランソワ・ド・サールがそうであった。この際にはイエズス会士が責務として複数の貸家を推薦し、ひとつを生徒に選ばせた。こうした貸家を生徒主監は直接または間接に監督し、賃貸の料金も定めた。なお、あまり富裕でない生徒に住いを貸したのは、プチ・コレージュの校長や寄宿学校の初級ラテン語教師であり、さらにはいわゆる〈町の先生〉、フランス語と算数の基礎だけを教える教師であった。こうした事情もときには紛争を惹き起した。十七世紀にはパリ大学がプチ・コレージュの校長の権限を制約し、大学の授業に浴さない生徒を下宿せまいよう命じた。外部で教育を受ける生徒に宿や食物を供しないため、寄宿学校の教師から権限を剥奪すること、また〈町の先生〉にも補佐として一名の助手しか許さないことが、一六九八年には懸案となった。そうした教師のもとではさまざまな学級や年齢の生徒が、ひとつの部屋に五〇人から六〇人、稀には八〇人から一〇〇人一緒に勉強したのである。一六九八年の威嚇が実行されれば、寄宿学校の教師や〈町の先生〉はルイ・ルグランの通学生に住いを提供できない。生徒にとつても家族にとつてもきわめて辛いことに、こうした紛争は鎮静した。加えて地方でもパリでも通学生はにわか教師の家、さらにはプチ・ブルジョ

アや職人の家庭に下宿していた。

これらの宿賃は手頃のものだったが、通学生のなかには懐の寂しい者も存在した。ルイ・ルグランでは哀れな生徒のため学友から布施を募り、日々の食物や学習ノートや必要な書物を購入させた。したがって、そこでもっとも裕かな生徒がもっとも貧しい生徒の様子を知ることができた。貧乏な子どもの若干は、乞食に至らないまでも、十五世紀の先輩と同じように、富裕な学友の卑屈な奉公人になった。

どこに住もうと、すべての通学生は校内でも校外でも生徒主監の監視のもとに置かれた。⁽³²⁾

ルイ・ルグランで訓練される学生のなかで特異な存在は通辞の候補生、いわゆる言語青年であった。近東諸国に派遣される通辞の養成は、重商主義と海外発展を標榜するコルベールの政策と連結している。親政に就いたルイ十四世のサン・ジャック街来訪とルイ・ルグランにおける言語青年の開設はほとんど同じ時期に行なわれた。⁽³³⁾ 世界各国からの留学生とともにこうした通辞の養成が、この学園に優れて国際的な色彩を添えたことは勿論である。引き続きデュボン・フェリエの著作から引用する。

最後の種類はもっとも少数の学生であるが、珍しいものである。それは中近東において通辞の資格でフランスの国益のため献身する使命を与えられた青年にほかならぬ。彼らは〈言語青年〉と呼ばれた。こうした着想はコルベールに遡り、一六六九年に最初の制度が造られた。一七〇〇年ルイ十四世はコレージュ・ルイ・ルグランで新たに奨学金一二件を設け、一二人の東洋人に授与した。こうした東方人はフランスと親密な〈アルメニア、ギリシア、シリア、コプト〉のもっとも信用ある家族から選抜されていた。ルイ・ルグランで彼らはアルメニア人と呼ばれる。十九世紀まで彼らはコレージュの一角に居住し、その建物もアルメニア館の名称で知られた。

東方人の徴募だけでは足りなかった。アレキサンドリア、エジプト、アレクポから連れてきた青年に代えて、親元が国内であるか、近東の諸港であるかを問わず、フランス人の子弟が一七二一年から採用された。件数は一二から一〇に減った。精神と性格を育成し易い年齢、ほぼ八歳のときに彼らは引き取られる。《言語青年》は原則として国王によって任命されるが、実際には海軍國務尚書のもとで選抜された。そして、ルイ・ルグランでラテン語、人文諸科、修辞学、ときには哲学までも教えられた。なおまたトルコ語とアラビア語を学ばせるため、ふたりの特別教師がコレージュに毎日来た。さらに《言語青年》はルイ・ルグランからへ送り出され、カプチン修道会のコレージュでオリエント語の初級を完了する。サン・ジャック街では校長が彼らについて責任を持ち、特別に派遣された神父が校長の権限のもとで補佐となった。海軍省はこうした《言語青年》の勉強、賞罰、健康について厳密な報告をたえず受けた。〔中略〕《言語青年》の精神的・肉体的条件、コンスタンティノープルのカプチン修道会における生活、出先の領事館からの要望に応じて、近東への出立が早くなったり、遅くなったりした。彼らのため周到な準備がなされる。リヨンの駅馬車に座席を確保し、海軍主計官とリヨン・マルセーユ市参事官への推薦状を持たせる。最後に旅行のため必要な費用や手当を支給する。《言語青年》の海外派遣は大抵八月から一〇月までの間を起点とした。⁽³⁴⁾

こうしてルイ・ルグランは拡大の一途を辿り、十七世紀中葉にはほぼ寄宿生五〇〇名、生徒総数二〇〇〇名、十八世紀前半には寄宿生五〇〇名、生徒総数三〇〇〇名に達した。このように人気を高めた理由をデュボン・フェリエはつぎの諸点にあると考えている。①コレージュ・ルイ・ルグランから伝統的にエリート的な行政者や聖職者が巣立ったこと。②通学生の学費を無償としたこと。③首都でイエズス会によって経営される唯一のコレージュであったこと。④シャルル九世からルイ十五世に至るまでたえず国王の庇護を受けたこと。⁽³⁵⁾

しかし、フランス教育史におけるルイ・ルグランの意義は、なによりも独自の校風や教育の内容に認めねばならない。学生の出身地、父母の階層、就学の形態をまず検討した私たちは、この学園の際立った特徴を理解した。多種多様な学生を擁するルイ・ルグランは、身分制社会の雛型であるとともに、アジア・アフリカへと拡張する国際関係の縮図なのである。イエズス会の排他的な教条や威圧的な訓練への反発にも拘らず、人民大衆への関心と国際的な視野を持つ啓蒙思想が、ルイ・ルグランの学風と共通な特徴を持つことは否定できないと思う。⁽³⁶⁾

〈註〉

本稿における主要な文献に関しては、下記の略号を使用する。(略号の大文字は著者名・編者名を、小文字は書名を示す。)

甲 哲学者エルヴェシウスの著作

- Hel : Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Esprit*, Paris, Durand, 1758.
 HelM : Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Esprit*, texte revue par Jacques Moutaux, Paris, Fayard, 1988.
 Hh1 : Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Homme, de ses facultés intellectuelles et de son éducation*, Londres, Société typographique, 1773. 2 volumes.
 HhM : Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Homme, de ses facultés intellectuelles et de son éducation*, texte revue par Geneviève et Jacques Moutaux, Paris, Fayard, 1989. 2 volumes.
 Hol : Claude-Adrien HELVETIUS, *Oeuvres complètes*, éd. par L. La Roche, Paris, P. Didot l'aîné, 1795. 14 volumes. (Georg Olms Verlagsbuchhandlung, Hildesheim, 1967.)
 エネニメ：エルヴェシウス著、根岸国孝訳『人間論』明治図書、一九六六年。

乙 その他の主要な文献

- Ch : Ian CUMMING, *Helvetius, His Life and Place in the History of Educational Thought*, London, Routledge and Kegan Paul Ltd.

1955.

Chc : J. CRETINEAU-JOLY. *Histoire religieuse, politique et littéraire de la Compagnie de Jésus*. Paris, Jacques Lecoffre. 1859. 4 volumes.

Dcl : Gustave DUPONT-FERRIER. *Du Collège de Clermont au Lycée Louis le Grand (1568-1920), la vie quotidienne d'un collège pendant plus de trois cent cinquante ans*. Paris, De Boccard. 1921. 3 volumes.

Djn : Aristide DOUARCHE. *L'Université de Paris et les jésuites (XVIIe et XVIIIe siècles)*. Paris, 1888. (Slatkine Reprints, Genève, 1970)

Ehc : G. EMOND. *Histoire du Collège de Louis-Le-Grand, ancien Collège des Jésuites à Paris, depuis sa fondation jusqu'en 1830*. Paris, Durand. 1845.

Se : Jean François de SAINT-LAMBERT. *Essai sur la vie et les ouvrages d'Helvétius*, dans *Hol.*, tome I, pp. 1-176.

(1) Chc, tome I, pp. 15-19.

(2) Chc, tome I, p. 19.

(3) Chc, tome I, pp. 15, 22-23.

(4) Chc, tome I, pp. 24-25.

なお、イグナティウス著『靈操』に含まれる左記の記述は、神秘的で戦闘的な思想の核心をよく表わしている。
「ふたつの旗についての黙想」

キリストの旗とルシェフェルの旗を黙想する。一方は、最高司令官である、われわれの主キリストの旗であり、他方は人間の不倶戴天の敵ルシェフェルの旗である。(中略)

【第一部ルシェフェルの旗】

第一要点 すべての敵の首領が、バビロニアの広大な原野で炎と煙の大玉座に座しているさまじい姿を想像する。

第二要点 ルシェフェルが数限りない悪魔を呼び集め、ある者をこの都市へ、他の者を他の都市へ散開させ、全世界に送ることを考察する。どんな地方でも、どんな場所でも、どんな身分であろうとも、どんな人物であろうとも、ルシェフェルはその一つをも見落とさないのである。

第三要点 ルシェフェルが配下にする説教を考察する。人々に綱を投げ、鎖をからめるように勧めている様を考察する。

まず第一に、富への欲望をもつて人々をいざない、それによつてもつと自然に世の空しい名譽を抱くようになり、ついに底知れない傲慢に一層たやすく陥るようになさる。これが多くの場合かれが取る常套手段である。従つて、第一に富の段階である。第二に名譽の段階である。第三に傲慢の段階である。ルシエフェルはこの三段階から他のあらゆる悪徳に引き込むのである。

〔第二部キリストの旗〕

これとは正反対に、眞の最高司令官の姿を想像しなければならぬ。われわれの主キリストこそ、その方だからである。
第一要点 われわれの主キリストがエルサレム付近の広野の低地に、うるわしい穏やかな御姿で静かにお立ちになる姿を考察する。

第二要点 全世界の主が、使徒や弟子たちなど、あまたの人々を選び出し、あらゆる身分や状況の人々に聖なる教えを拡めるために、彼らを全世界に遣わす次第を考察する。

第三要点 われわれの主キリストがこの使命に遣わす僕や友のすべてに向つて語られる言葉を考察する。キリストはつぎのような方法ですべての人を助けるように努めることをかれらに勧めるのである。人々をまず、いと高き靈的清貧に導く。もし「神聖な威厳に満ちた方」がかれらを奉仕させようと思われ、かれらを選ぶなら、実際上の清貧にもかれらを導く。第二に辱めや蔑みさえを願望 (DISEÑO) するように導く。なぜなら、この二つから謙遜がおのずから生ずるからである。

したがつて三つの段階がある。第一は富に対する清貧の段階。第二は、世俗的名譽に対する辱めや蔑みの段階。第三は傲慢に対する謙遜の段階である。これらの三段階から他のすべての善徳に人々を導き入れるのである。「イグナチオ・デ・ロヨラ著、門脇佳吉訳『靈操』岩波書店、一九九五年。一五〇―一五五頁。』

- (5) *Chc. tome I, pp. 26-29, 43-49.*
- (6) *Chc. tome I, pp. 44-45.*
- (7) *Chc. tome I, pp. 110-119, 134-138, 160-203.*
- (8) 河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』平凡社、一九九四年。第二卷、二一六―二二七頁。
- (9) 同書。第三卷、四九―五一頁。

ちなみにサビエルは一五四九年八月一日(聖母披昇天祝日)に鹿児島へ上陸した。風土の厳しさを仏教的な因習に眉をひそめながら、彼は日本人の道徳性を高く評価し、キリスト教の伝播を樂觀的に考えたようである。ゴアのイエズス会士

に宛てたザビエルの同年十一月五日付書簡をつぎに抜粹する。

「日本についてこの地で私たちが経験によつて知りえたことを、あなたたちにお知らせします。

第一に、私たちが交際することによつて知りえた限りでは、この国の人びとは今までに発見された国民のなかで最高であり、日本人より優れている人びとは、異教徒のあいだでは見つけられないでしょう。彼らは親しみやすく、一般に善良で、悪意がありません。驚くほど名譽心の強い人びとで、他の何ものよりも名譽を重んじます。大部分の人びとは貧しいのですが、武士も、そうでない人びとも、貧しいことを不名譽とは思っていません。〔中略〕

彼らはいへん喜んで神のことを聞きます。とくにそれを理解した時にはたいへんな喜びようです。過去の生活においていろいろな地方を見てきた限りでは、それがキリスト教信者の地方であつても、そうでない地方であつても、盗みについてこれほどまでに節操のある人びとを見たことがありません。〔中略〕

私があるたにお知らせしたい唯一のこと、それは主なる神に大きな感謝を捧げていただきたいことです。この島、日本は、聖なる信仰を大きく広めるためにきわめてよく整えられた国です。そしてもし私たちが日本語を話すことができれば、多くの人びとが信者になることは疑いありません。主なる神は私たちが短い期間に〔日本語を〕覚えるならば、きっとお喜びくださるでしょう。私たちはすでに日本語を好きになりはじめ、四〇日間で神の十戒を説明できるくらいは覚ええました。〔中略〕大天使聖ミカエルの祝日〔九月二十九日〕にこの地の領主〔平戸領主松浦隆信〕と会談しました。領主はたいへん丁寧に申すに及ばず、キリスト教の教理が書かれている本を大切にするように言われました。そしてもしも、イエス・キリストの教えが真理であり、良いものであれば、悪魔はいへん苦しむであろうと言われました。数日後、その臣下たちにキリスト信者になりたい者はすべて信者になつてもよいと許可を与えました。〔同書。第三卷、九六、九七、一〇一—一〇二、一三二頁。〕

- (11) *Cbc*, tome I, pp. 250, 275—277.
- (12) *Duj*, pp. 55—56.
- (13) *Duj*, pp. 56—57, 64—65. *Ehc*, pp. 4—9.
- (14) *Avis et résolution de l'assemblée du clergé tenu à Poissy en 1561*, dans *Ehc*, pp. 300—304.
- (15) *Duj*, pp. 65—66. *Ehc*, pp. 8—9.
- (16) *Ehc*, pp. 10—11.
- (17) *Duj*, pp. 33—34, 301—303. *Ehc*, pp. 11, 19—26, 129—130.

フランス教育史の権威ガブリエル・コンペイレがイエズス会に与えた評価はよく知られている。

「十六世紀の教育における最大の事件は、イエズス会の結成とこの修道会による迅速な学校の設置であった。〔中略〕一六五一年にコレージュ・ド・クレルモンの生徒数は二〇〇人以上に至り、一六七五年には三〇〇〇人近くに及んだ。十七世紀の初頭からバリだけで一万四〇〇〇人の寄宿生を送り出した。優れた教育方法の成果として、彼らのなかにフランスでもっとも著名な人物が多数含まれると、神父たちは誇らしげに言う。」(Gabriel COMPAYRE, *Histoire des Doctrines de l'éducation en France depuis le seizième siècle*, Paris, Hachette, 1898, pp. 162-165.)

- (18) *Etc.*, pp. 133-135.
- (19) GRIMM, DIDEROT, RAYAL, MEISTER, etc. *Correspondance littéraire philosophique et critique*, Paris, Garnier Freres, 1879, tome IX, pp. 417-418.
- (20) *Se.* pp. 4-6.
- (21) *Ch.* pp. 10-11.
- (22) *Hel.* pp. 632-633. *Hol.*, tome VI, pp. 183-184. *Hem.*, pp. 553-554.
- (23) *Hht.*, tome II, pp. 625-627. *Hol.*, tome XII, pp. 84-87. *HhM.*, tome I, pp. 889-890. エネニメ、一五七一-一五八頁。
- (24) *Dcl.*, tome I, pp. 62-63.
- デュボン・フェリエは二十世紀初頭にリセ・ルイ・ルクランの教授を勤め、のちに同校の名譽教授に選ばれた。彼は女子高等師範学校の教授を兼務し、ほかに『小学校、リセ、コレージュ、図書館―パリにおける公教育』(一九一三年刊)などを著している。
- (25) *Dcl.*, tome I, pp. 63-64.
- (26) *Dcl.*, tome I, pp. 64-65.
- 大法官の五男であったクレチアン・ギョーム・R・マルゼルブは、『百科全書』刊行の時期に出版統制局長を勤め、ルソーやエルヴェシウスとも親交を持った。一七二七年に彼は六歳でルイ・ルクランに入学し、一七三七年十六歳で中途退学した。グロスクロードによる詳細な評伝には父親ギョーム・ラモワイニオンから退学の直前に送られた書翰が収録されている。息子の勉学や品行について助言したものであるが、長文の手紙はつぎのような文で始まっている。
- 「息子に宛てたギョーム・ラモワイニオンの激励の手紙〔一七三七年四月一六日〕
- わが子よ、退学するのを機会としてそなたの品行について必要と思われる助言を与えたい。

いまそなたはコレージュを去り、世間に出る間際にいる。これこそそなたの人生においても重要な瞬間であり、当初いかに行動するかによって、現世および来世で幸福になれるか否かが決まる。一〇年間そなたは学寮で暮し、宗教と美德への感情を不断に鼓吹されてきた。この間そなたの身分にもっとも相応しい教育を授けられ、世間で名声を得るのに十分な配慮と学費を受けている。また、ここでの教えを肝に銘じて、生来の才能を磨き、正義を行い、予言を語ることもできる。だが、すべてこれらが無益であり、恩知らずで不毛な土地に種を蒔いたのであれば、また授けられた偉大な教育をそなたが活用するのでなく、怠惰と乱雑のうちに埋没するのであれば、なんたる不幸と語りべきであろうか。」

[Pierre GROSCLAUDE, *Malesherbes, témoin et interprète de son temps*, Paris, Firschbacher, 1961, p. 45.]

(27) *Dcl*, tome I, pp. 68.

なお、ヴォルテールは一七〇四年十月ルイ・ルグランの第六学級に十歳で入学し、七年間の在学のあと一七一一年七月に哲学級を卒業した。父親は彼をイエズス会の学園に委ねたのは、狂信的なヤンセン派となった長男に閉口したためでもあった。しかし、一層大きな理由はルイ・ルグランが國王聽罪司祭のラ・シェーズ神父や大法官のル・テリエ神父に愛顧され、宮廷等での立身出世に直結したからであろう。[René POMÉAU, *D'Arnaud à Voltaire 1694-1734*, Oxford, Voltaire Fondation, 1985, pp. 37-38.]

(28) *Dcl*, tome I, pp. 68-72.

Dcl, tome I, p. 72.

カルティエ・ラタンの名門コレージュ・ド・ボアシイは一三五八年に創設され、一七六三年ルイ・ルグランに併合された。著名なラシュドールの『大学史』にはこの学園における寄宿生の放埒が過ぎのとおりに叙述されている。

「ボアシイ (Bois) には寮長の許可をえずに夜昼を問わず常習的に外出する学生があった。ある時は太刀を身につけた飲み友達を連れ帰り、寮の門が閉まっていると、大きな石で叩きこわそうとした。同僚学生の一人を殴打して破門を宣告されても、赦罪を求めるところか、礼拝堂への侵入をはかった上、強制的に追い出されると、他の者がミサにあずかっている間に自分の部屋に帰り、そのベッドに放火したので、寮はあやうく焼け落ちるところであった。またある時は、夕食の最中に、食堂の屋根へ馬鹿力で大石を投げ、そのために、食物が灰だらけになったし、学生たちは、それに類した迷惑で、講義室への入室を断念させられたりもした。そこで遂に学頭がそうした無法の尋問に彼を呼び出すと、今度は大学団法廷の開かれるシトー会修道院と学頭の家の途中に、自分の兄弟と八人から十人の武装した連中を配置して、学頭が法廷に行くのを妨げようとさえしたのであった。」[ラシュドール著、横尾壮英訳『大学の起源—ヨーロッパ中世大学史—』東

- 洋館、一九六七年。上、三九〇頁。]
- (30) *Dcl*, tome I, pp. 72-73.
- (31) J. SIRVEN, *Les Amies d'apprentissage de Descartes*, Paris: Albi, 1928, p. 25.
- 因みに一五九八年トゥレーヌで生まれたデカルトは、六歳でコレージュ・ド・ラ・フレージシュに入学し、一六〇四年から一六二二年まで在籍した。「方法序説」で語られるように、この学園で受けた指導と教育は彼の精神形成に深い刻印を残した。[*ibid.*, pp. 25-28.]
- (32) *Dcl*, tome I, pp. 74-75.
- (33) 言語青年学校の創設とフランスの外交政策との関連は、エモンによる「コレージュ・ルイ・ルグランの歴史」のなかでかなり詳しく説明されている。
- 「その根源を述べれば、トルコにおけるフランスの政治的・商業的關係が大きな障害に直面していた。回教徒には自国の言語しか覚える気がないので、フランスの大使や商人はキーオス島やアルキペル諸島で余儀なく通辞を雇った。そうした地域は近年ジェノアとヴェネチアの支配からオスマン・トルコの支配へ移り、通訳はトルコ語とイタリア語も同程度に解する。近東の諸港で彼らはトルコの権力者のためフランス語の通辞を勤めるだけでなく、あらゆる要務においてその手足として働き、法廷では検事や弁護人にさえなっていた。コンスタンチノープルでも果たすべき本来の職務とは別に、そうした通辞が高位高官の宮殿でフランス大使の文書を翻訳し、彼らの代理人となつて政務を処理したのである。
- これらの雇人は教育を受けず、国際法もヨーロッパの政治も知らなかった。東洋的な専制主義のもとで生まれ、退廃している彼らは、フランスの威信と利益を擁護するのに必要な心魂と精神の高貴さを持ちえない。フランス通辞の養成機関を設立するよう、コルベールはルイ十四世に進言した。彼らは国家の経費で育成され、東洋のさまざまな言語を学んで、教育と学識の輝きを示すであろう。こうして言語青年学校が一六六九年十月一日に創設された。」(*Dju*, pp. 131-132)
- (34) *Dcl*, tome I, pp. 75-76.
- (35) *Dcl*, tome I, pp. 76-78.
- (36) イエズス会の布教・教育がフランス近代思想の成立に及ぼした影響は、実証的な分析をおし再評価することが必要と思われる。教育の歴史におけるイエズス会の役割を重視したデュルケームは、つとに研究の新たな視点を提示していた。
- 「ジェスイットの教育に対してこんなにも人々の需要があつたのはその価値が認められ、他の教育よりもよいと判断されたからであり、それが時代の趣向や要求に応じていたからでもある。そして疑いもなく、そのことこそ、彼等の教育が

あれ程多くの敵、多くの障害があつたにもかかわらず、わが国の風土に深く根をおろすことに成功した理由なのである。彼等の技巧がどれほどすぐれていたにせよ、彼等自身か世論の支持をうけていなかったならば、その技巧だけでは彼等を敵対的勢力の連合から護るには充分でなかつたであろう。

それ故、ジェスイットたちが実践してきた方法を研究し、それを大学が当時それと平行して行つていた方法と比較することによつて、われわれはジェスイット学校のすばらしい成功を理解することができるのである。その研究を行うためには当然のことながら、これまでジェスイットには与えられていなかった公平無私の態度をもつてすることが必要である。そして、これは承知しておくべきことであるが、その公平さは彼等にたいしてはともすれば与えられなかつたのである。

〔中略〕彼等の学校の仕事の意義を正しく評価するためには、こうした感情的な印象をすべて一掃しなければならぬのである。そしてわれわれが一七世紀、一八世紀のもつとも偉大な人々は、すべてジェスイットのコレージュで学んだ人であつたということ、そして、一般的にいって、ジェスイットの教育がわが国の国民的特質を形成するのに非常に大きく貢献し、国民的特質にその最上の成熟期に示した特徴的な性格を支えることに貢献したことを考えるならば、感情的印象を一掃することは困難ではないであろう。そしてこうした結論はこのような研究から得られるのである。〔デュルケム著、小関藤一郎訳「フランス教育思想史」下、一二七—一二九頁。〕